

SSRI

ちょっと一言

Give me a break !

中国「皇帝」になった習近平の「宮廷政治」

樋口 譲次

中国共産党の第19回党大会が10月24日に閉幕した。

習近平総書記は、党の憲法にあたる党規約の行動指針に「習近平の新時代の中国の特色ある社会主義思想」と自らの名前を冠した政治理念を盛り込んだ。また、党大会の焦点となっていた次期最高指導部人事で、自らの後継候補を指定しない異例の措置に踏み切り、7人で構成される政治局常務委員の過半数を「習派」で固めた。

習近平は、神格化と権力集中に成功し、中国の至高の存在、すなわち「皇帝」になったのである。

皇帝になった習近平は、中国社会で永遠と続いてきた「宮廷政治」をさらに強化することになりそうだ。

宮廷政治とは、政治的決定が被治者と隔絶した＜宮廷＞においてなされる政治をいう。宮廷政治は、被治者が政治勢力として政治過程に関与することがなく、また、支配層も君主（あるいは独裁者）の対抗勢力になりうるだけの力をもっておらず、君主の周囲に集まって宮廷貴族、宮廷官僚層を形成している場合に成立する。この場合、宮廷内の政治過程が被治者に公開されていないため、政治的決定は君主の命令の形で表現される。（世界大百科事典 第2版の解説）

前述の後継者指定問題は、まさに宮廷政治を行っている中国社会の独特な問題である。つまり、「党が全てを指導し、何人も党の指導に従わなければならない」とする中国共産党一党独裁体制では、指導者が次の継承順序を決めるという民主国家には考えられない仕組みの維持が必須で、その結果、いわゆる身内の権力闘争が絶えないのである。

今回、後継者を決めなかったことは、習近平が自ら3期目の総書記、すなわち皇帝の地位に留まる意思と可能性を残したことを意味する。

習近平は、自らの使命を「強軍」「強国」に置き、建国100周年を迎える今世紀中ごろまでに「社会主義現代化強国」を構築する長期目標を掲げた。また、2050年までには「総合的な国力と国際影響力において世界の先頭に立つ国家になる」と宣言した。

今後、習近平治下の中国は、「内には統制強化、外には覇権的拡大」を行うとみられ、「異質な国家」と隣り合わせの日本は、ますます厳しい舵取りを迫られるのである。

（2017年11月12日）